ウルフと笑い

――『天使よ故郷を見よ』再論

米山　益巳

I

先ずは、この世の「処世訓」を覆さんばかりに「とてつもない長い時間」の果てに生まれ出て、ガント家の「遺産相続人」の一人とあいなったわがユージーン（“Eugene”）の誕生を叙した一節を引いてみる。

> 法定推定相続人は、完璧なる外見のためにも、部分の調和のためにも、そして効果の統一のためにも、この上なく精力的な競争社会において必要とされるありとあらゆる付属品を、スクリュー、コック、蛇口、ホック、目、爪等何一つ欠けることなく身に備えこの世へのデビューを果たしえた。（Ⅳ）

ユージーンが見事なまでに「小型の完全な男」としてこの世に登場したことを記している訳だが、この異化的筆法はいかにも笑いを意図したものだ。母親のエライザが命名したユージーンなる名前の由来を語った箇所も意図されていることは笑いを措いて他にない。(1)

> その名前は美しくも「名門の生まれ」と言う意味であり、やがて誰もが証言できるであろうように「りっぱに育てられた」と言う意味ではない。そんなことを意味したことは一度としてないのだが。（Ⅳ）

ギリシャ語に由来したユージーンなる語に関しペダンチックに語られた一節だが、見ての通りこれまた滑稽な語りとなっている。この直後に続く詳細を極めた歴史的出来事の列挙とてこの一つの異形にすぎない。そこにはユージーンが生まれた1900年に至るまでの世界のあれやこれやの出来事が、まるで総ざらいせんばかりに倦むことなく綴られている。こんな具合に―「オスカー・ワイルド、ジェイムズ・マックニール・ウイスラーは世紀の変わり目までには警句をほぼ言い尽くしてい…1899年には英国が残酷にも南

アフリカに最後通牒を送りつけてい…1891年に初めて議会が開催された日本は（「第一回帝国議会」が開かれたのは1890年だが、ここは原文のままとしておく一筆者注）、1894年から1895年にかけて支那と戦争をし、その結果台湾が割譲され…時代を更に下れば、（初代のインド総督であった）ウオーレン・ヘイスティングズが告発されて裁きを受け…アンティータムの戦いが行われ…スペインの無敵艦隊が敗れ、はたまたリンカーン大統領が暗殺されてい…ほんの3千万年から4千万年前には、我々人類の最初期の祖先が太古の泥土の中から這い出てきたのだが、定めし、あたりに不快なものを感じ取ったに違いない、再び泥土の中へと戻ってしまった」。（Ⅳ）

物語展開から言えば殆どどうでもいいことを長々と書き連ねているのだが、このようなことを許容する論理はといえばおそらくそれは一つしかないだろう。このテキストがコミック・ノベルでもあったればこそということに。だからこそ幼少期のユージーンを描いたこんなくだりも出てくるのである―「そんなことはしてほしくないのに、跳ね回り、頭を振り動かし、手荒くくすぐったりしてキャアキャアわめいたりしている」家族の「間違い喜劇」を「笑わずにいられなかった」、などというおよそナンセンスな箇所も。「二歳」にも満たない、言葉すらまともに話せない幼い子が、大人たちのしでかしているその「愚行」を一人密かに笑っているのだ。因みにユージーンの「告白」によれば、この頃のユージーンは「記号の貧困」にいたく苦しめられていたのだが、加えて我が身の「しまりのないがさつな膀胱」（Ⅳ）にもうんざりしていた由。

ほんの数例を思いつくままに挙げてみたまでだが、『天使よ故郷を見よ』（以下『天使』と略記）の一つの色調を知るためにはこれだけでも十分だろう。ウルフのこのような笑いがこれまで俎上に載せられたことがないなどということはありえない。大恐慌時の1930年代、　アメリカが「立ち直る」ために必要としたものは、悲しみに打ちひしがれた主人公の後姿をもって結ばれる『武器よさらば』（ヘミングウエイ）のような小説ではなく、それと同年（1929年）に刊行されたもう一つの小説、コミック・キャラクターが次々と繰り出す「活気」に溢れた『天使』のような作品であった、と述べたマックエルダーは、ウルフを「マーク・トウエイン以来の最も優れたユーモリストの一人であった」[(2)] と、最大級の賛辞を呈し、その後もパスカル・リーヴズがウルフのユーモアの出所を「オーラル」[(3)] の伝統から説き、更にはフロイド・ワトキンズ[(4)]、エリザベス・エバンズ[(5)] 等の論考もあった。しかし、くまなく論じ尽くされたということでは決してない。とりわけ笑いの意義、その機能に関しては更なる検討が施されてしかるべきだろう。本稿は、かくある笑いが、テキスト内で果たしているその緒機能を改めて一考せんとしたものである（ここで言う「笑い」は、テキストが喚起している笑いのみならず、作中で登場人物そのものが笑っている、言うなれば一次資料的な笑いをも含めて

のものであることを断っておきたい)。

Ⅱ

機能ということになると真っ先に挙げるべきは、人物像との関わりあいから見た笑いということになろう。それは一読忘れがたい緒人物の造形にさいして、なくてはならない大切な役割を演じているのだから。エライザが「7500ドル」で手に入れた「ディクシーランド館」の元の所有者、「馬づら」の牧師ウエリントン・ホッジなる人物、この人物が記憶に残る人物として存在し続けるのは、ストーリー展開上重要な位置を占める「ディクシーランド館」の持ち主であったからではない。月並みな牧師像とは甚だ異なる、なんとも滑稽千万な人物と化しているからだ。「中年」の「紳士」ホッジは、牧師としてアルタモントで暮らし始めたのだが、やがて「万軍の主・エホバ」と「ジョン・バーレイコーン」(アルコール)の二つの神に仕え始めたのが運のつき、「雪」の降るある日の「夜中午前2時」、「厚ぼったい下着」姿で「ディクシーランド館」から勇ましく「出撃」し、「神の国」の到来と「悪魔の追放」を叫びながら、がむしゃらに街路を走り回り、やがて力尽きて倒れこみ、哀れにも、聖職者に対する人々の共同幻想をひどく傷つけたその大罪により、聖なる職を剥奪されてしまうという、なんとも無様な結末をむかえることになる人物。かくしてホッジは、「速い馬」の産出地にして「風になびく草原」、そしてなによりも「うまいウイスキー」(XI)が待っているなつかしの故郷・ケンタッキーへと帰ってゆくことになるのだが、コミカルな語りによってほんの群小人物の一人にしか過ぎないにもかかわらず色鮮やかに生き続けているという次第。

ガント一家の家族の肖像を語るに際しても、笑いを抜きにする訳にはゆかない。とりわけ際立った人物はと言えば、無論、W・O・ガントということになるのだが、ガントについてはしばらく措き、その息子の一人ユージーンについてもう少し触れておくことにしたい。次作の『時と河』においても中心人物として存在するこの人物について、トーマス・C・モーザーはかつてこんな風に評した―「幸せになることを熱望しながらもそれが叶わぬことを知るユージーンは、いかにも若者らしい自己憐憫に陥る。それも年齢を重ねれば重ねるほど己に対する憐れみの感はいよいよあからさまとなり、それと共に主人公としての興味が失われてゆく。ウルフが拙劣に書くときには主題は殆どいつもユージーンだ」。[6] ユージーン(=ウルフ)がしばしば陥る悪評高き自己憐憫を難じているのだが、このような評価は正鵠を得ているとは言い難いだろう。往々にして見過ごされていることだが、実はユージーン像は一つしかないのではない。先に挙げたような幼少期のユージーンとてれっきとしたユージーン像の一つではないのか。そのようなユ

ージーンをも包摂しえない人物評は偏頗のそしりを免れないだろう。いや、そもそもこの物語の基本構造は主人公・ユージーンの変貌を旨とする「成長物語」ではなかったのか。

「鐘」の音を合図に、クリスマスのプレゼントとしてガントに買ってもらった「はしご付き消防馬車」で隣家に赴き、許可なく「はしご」をかけて「窓」を開け、「家宅侵入」を企て「想像上の火」を消して、「被災」家屋のかみさんの怒りの「金切り声」を背に浴びながら帰ってくる、「消防夫」（Ⅷ）としての大冒険に興じるユージーンは、自己憐憫に陥るユージーンなどとは無縁のユージーンだが、しかしこれとてユージーンであることには相違ない。しかもこのようなユージーン像は、ほんのたまさか垣間見られる、例外的なものなのでは毛頭ない。ユージーンの成長過程において、実はしばしばみとめられるものなのだ。その実態を知ってもらうべく、いささか煩瑣な嫌いはあるが少しくその種のものを列挙してみる。

「悪行・悪事」の「アイデアマン」、ペンキ屋の息子・ハリーと「毛はえ薬が半分残っているビン」を見つけ、「大人」になりたくお腹にそれをぬりつけて、「金の羊毛」（Ⅳ）が生えるのを、今か今かと待ちわびるユージーン。「先生」の目を盗んでは、オットーなる「ドイツ人の少年」と二人して、地理の教科書に掲載された「南洋の先住民」の挿絵に、「みだらな絵」（Ⅷ）を描いては楽しんでいるユージーン。そのユージーンは町の「広場」に建つ「図書館」で、「略奪」せんばかりに「児童図書」を読み漁る、希代の大読書家であったが、超ロマンティツクな物語を読んだときには「濡れた目を光の射し込む窓に向け、まばたきしては嗚咽し、大きな音をたてて鼻をかむ」（Ⅸ）感性豊かな少年でもあった。ロマンティツクな物語で養われたユージーンの夢想癖は留まるところを知らず、「えり抜きの凶暴な兵士」を従えて「戦場」で敵を皆殺しにした時には、「ナポレオン」（Ⅸ）きどりで悦にいる。「耳の遠い年老いた母親」と「小さな小屋」でくらしていた「人参のような髪」をした「女性教師」との「熱いロマンス」（Ⅸ）も、肥大した夢想癖の所産の一つだ。これらのことどもはユージーンが10歳に満たないころの出来事であったが、齢を重ね14歳になった頃も依然としてそれは健在だ。その頃第一次世界大戦が勃発する。戦火が拡大するにつれ、いくつもの戦記物が出回る。そんな本を「アルタモント塾」の教師・マーガレットから借りてしこたまユージーンは読みふけり、「自分の命を奪うことになるであろう敵軍への攻撃が行われるその前夜には、輝かしき言葉を書き留めることもあった。そして目を輝かせ、自分の最後の言葉を読み、死後の栄光に酔いしれ自分の死を見届けると、己の死体の上に二つぶの熱い涙を落としもした」。（XXV）このようなユージーンの「白昼夢」に「未生前の楽園の喪失」を原基とした、「孤独からの逃避」(7) を見出すには及ばないだろう。そのように解したのでは、こ

のテキストが成し遂げている笑いの文学としての美点を、すっかり捉え損ねてしまう。

ウルフの描く少年時代のユージーンは、「環境」に適応した「ノーマルで幸福な子供」の像とは「程遠い」[8] などと、不用意に断じるようなことは慎まねばならない。一体、「塾」の教室で「自然のもたらす恥ずべきこと」を先生に告げられず、耐えに耐え、ついには両手の中に嘔吐してしまうユージーンは、正常から逸脱した異常な少年なのだろうか。そんなはずはないだろう。不幸にして、トイレに行くことの許しを得ては授業をさぼっている、ほうらつ、「怠惰」な「級友」（Ⅷ）のような悪しき生徒になれなかったにすぎないのではないのか。このような挿話は、ユージーンの成長の軌跡を描くためになくてはならないものとしてあったにすぎない。硬直化したシリアスな視点が陥りがちな狭隘さを免れるその方途を、ウルフは良く知っていたのだ。早くにオールダス・ハクスリーが言った言い方に倣って換言すれば、この小説は、「大河の水面に生ずる渦」を「一つだけ」任意に取り出して、もっぱらそれのみを素材としたような小説なのではなく、「渦の存在」のみか「河」の総体をも、つまりはそこにある「事実の総体」（“the whole truth”）[9] を描き出そうとした、一種「壮大」な小説である。

大学時代、ユージーンは見知らぬ小さな町に出かけては、ホテルの宿帳に詩人達の名前（ロバート・ヘリック、ジョン・ダン、ジョージ・ピール、ウイリアム・ブレイク、ジョン・ミルトン、ベン・ジョンソン等々）（XXXⅧ）を記入するなどといういたずらに打ち興じてもいるのだが、これとて、ユージーンの異常性を描いているものなのではない。詩に傾倒した一人の若者をただユーモラスに描いているにすぎない。「第二の我」たるユージーンが、一個の人物像としてどこまで成功裡に造形されえたかについては、諸家の説く通り疑問の余地が大いにあると言わざるを得ない。このテキストの有した活力の一部が、それが属するジャンルの「曖昧性」[10] に、あるいはその「混交」[11] ぶりにあるとは言えても、「むき出しの感情」もあらわに、「ターザン」[12] まがいの叫び声をあげているユージーンに、訴える力を感得する読者がどれだけいるであろうか。ウルフ文学への評価が今尚定まらない感をあたえているのも、まあ頷けようというもの。しかし少なくとも、笑いという距離を持って描かれたユージーン像はこの限りではない。その意味でユージーンの喚起する笑いは、どうでもいい瑣末なものではない。ユージーンについてはこの位にして、「大陸」を流れ流れて「再建期」の「南部」に辿り着いた「異邦人」、身の丈「6フィート・4インチ」（Ⅰ）の巨人、かのガントについて次に見てみよう。

Ⅲ

ガントの生気、活力を作り上げている最重要な事項は、言わずと知れたあの大仰にして芝居じみた「うねるような修辞の潮（“rolling tide of rhetoric”）」（Ⅰ）である。しかしその殆どは、美しい感動的な雄弁などとは到底評せない、口汚い悪罵のそれだ。エライザが資産作りにと下宿屋の「ディクシーランド館」（ガントは「納屋」と呼んで蔑んだ）を手に入れその経営に乗り出し、二人が別居状態になった時には、ガントの雄弁なるののしりはいつにも増して凄みを増す。

女め、よくも貴様は家庭を見捨てていきやがったな。よくもわしを世間の笑いものにし、子供たちが非業の死を遂げるがままにさせやがったな。お前は鬼畜生だ。ただただこのわしを苦しめ、辱め、愚弄する。老いの身のこのわしを見捨てて、一人淋しくお陀仏させようというのだな。ああ、貴様が憎たらしい。貴様が恐ろしき納屋を一人満足げに眺めおったあの日は、一家にとっては、なんとも苦々しい恨みの日じゃわい。（XI）

このような罵声を浴びせられたのはエライザ一人に限らない。好色漢でもあったガントが、一時はかない色恋沙汰を起こした「子持ちの女」へのののしりを見よ。

ばいため。殺してやる。貴様はわしの心の臓の血を吸い取り、破滅の瀬戸際にまで追いやりやがった…この世のものならぬ、まこと、にっくき怪物め。（XXI）

ガントの「名誉」のために一言言い添えておくが、このような時のガントはしばしばしこたま酒をくらってい、いわば泥酔状態にあった。

こともあろうに、ユージーン誕生の時にも、「またまた食いぶちが増えたわい。ああ、恐ろしきこと、残酷なこと」（Ⅳ）などと言ってわめいている。それだけではない。息子のベンが「殆ど意識をなくし、こん睡状態」に陥っているというのに、なんと次のように言い立てている。

ああ神よ、耐えられぬ。何ゆえにこのような苦しみを、このわしは負わねばならないのか。老いた病の身じゃというのに。それに金がどこにあるというのか。この恐ろしき残酷な冬をどうやって過ごせと言うのか。こやつを埋めるには一千ドルもかかるのだ。そんな金がどこにあるというのだ。（XXXV）

「本能」と化したガントの仰々しい悪罵の範例であるが、しかし早まって誤解しないようにしよう。これをもってガントを悪人だなどとすぐさま決め付けてはならないのだ。現に、ガントに「ばいた」とののしられ逃げまどう「子持ちの女」は、「あんな風に言われたことはこれまで一度としてない」と言って激しく憤りはするのだが、一方で、「あの人は悪い人なんかではないのよ」と、ガントを擁護もしている。ガントが通った娼家の女将・エリザベスも、酔漢となったガントを引き取りに来た長男・スティーヴに言っていたのではないのか（ガントの剥げ頭にキスをしながら）。

坊や、この老いぼれ雄鶏みたいな大人になっちゃだめよ。でもこの人もその気になったときには本当にいい人間なんだけどねえ。（Ⅲ）

「酔っていなければ、あんなに立派な人はいない」（Ⅲ）と語った宝石商・ジャナードの「証言」もある。そう、確かにガントは「いい人」、「立派な人」でもあったのだ。地域の「禁酒運動」に共鳴し、飲酒の賛否を問う投票で、否に一票を投じた時のガントは、「頼むからゲップだけはするなよ」と酒場の主・ネザーソールにひどいいやみを言われながらも、堂々たる論陣を張ったまさに「善人」そのものであった。ガントは言ったのだ―「酒は呪いだ、苦悩の種だ。数え切れないほどの人間を苦しませてきたのが酒だ…妻の心を、母の心を打ち砕き、幼いみなしごの口からパンを奪いとってきたのも酒なのだ」。（XXI）悪癖は絶つべしと説くそのガントを描くにさいしてウルフは、その時ガントが西方、ヘブライの預言者・モーゼが約束の地・カナンを眺めた「ピスガの山」の方を見やっていたなどと、少々文脈にそぐわない「モック・ヒロイック」[13] 調の表現で記してはいるのだが、しかし、その叙法をもってガントの「高邁」なる精神をウルフが嘲笑っている、などとは解さないほうがいいだろう。「悪魔たる酒（“the Demon Rum”）」の害毒を唱えるガントの演説は誇るに足るガントの真正な思いの表明であったのだから。ただし、同じく禁酒を誓い（それも「判事」の前で）、そのうえ万全を期すべく署名さえしたハックの父親「パップ」（“Pap”）（『ハックルベリー・フインの冒険』第5章）さながらに、ガントにしては、いささかできすぎた「善行」についついおよんでしまった感は否めない。「二ヶ月」もたたないうちに、「潤いのない渇き」にうめき、ついにボルティモアから酒を取り寄せてしまったのも無理からぬことではあったか。

これを要するに、ガントは「治療」（Ⅱ、Ⅲ）さえ受ける程の、名にしおう酔いどれではあったが、にもかかわらず「愛すべき人物」[14] に仕立て上げられているということだ。「修辞の潮」に身を任せたときのガントが、「うすいもの悲しげな口元」に、「含羞」を隠すように、「かすかな笑み」を「ぎこちなく」（Ⅰ）浮かべているのも、ガント

の悪態の本体がいかなるものであったかをよく語っているはずだ。「大いなる喜劇的知性」を有したガント家の子供たちが、夕暮れ時、ガントが仕事場から帰ってくるのを「喜々」として待ち構えているのもさもありなん。ガントが初めてエライザを目にしたとき、エライザは「街角を、蛇のごとくにのたくるように這っていたのだ」などと語るときには、それこそけたたましい「金切り声」（Ⅵ）をあげて喜んでいる。ガントは「良き」父親でもあったのだ。酔っては怒り狂うガントの悪態に、涙を流すことさえしているエライザですら、時にはそのガントに救われてもいた。双子の一人として生まれたグローバーが、「山の樹木」が「褐色の葉」でおおわれる「秋の11月」、「12年と20日」（Ⅴ）の生涯で逝ってしまったとき、エライザは「大きな心の痛手」を蒙っていたのだが、ガントの「無秩序然とした乱暴なレトリック」から、「なにがしかの刺激」（Ⅵ）を得ていた。「苦境」を「無化」し、「耐え難い現実」からの「脱却」(15) を可能せしめたガントは、ありがたき救いの主であったのだ。

ガントとエライザの「反目」、「戦い」を、生真面目に読むことが、どこか実状を歪めるかのように思われるのも不思議ではない。この問題に初めて触れた一節を改めて見てみよう。ガントに劣らず、「言葉」にいたく「魅了」され、「修辞」の「意匠」(16) にわれを忘れた小説家・ウルフに似つかわしく、それは「叙事詩」(17) まがいのなんとも重厚な語りとなっている。

> 最初から、二人の間では愛よりも深い、憎しみより深い、肉を削ぎ落とした骨の髄ほどに深い、勝負を決する最後の決戦が隠微に行われていた。（"…from the first, deeper than love, deeper than hate, as deep as the unfleshed bones of life, an obscure and final warfare was being waged between them."）（Ⅱ）

二人の間に「戦い」があったことは見紛うべくもない。大仰な罵倒の文句を、ガントは「儀式」（Ⅴ）よろしくしばしばエライザに投げつけてい、毒舌を浴びたエライザは、涙を流すことすらあったのだから。しかしその争いをつたえている、過度なまでに装飾の施された上掲の文は、まさにその過剰性をもって滑稽の域にまで入り込んでい、二人の争いを過大視しないよう「警告」している、そんな一文となってはいないだろうか。「愛よりも深い、憎しみよりも深い、肉を削ぎ落とした骨の髄ほどに深い」などと反復記述される「最後の決戦」は、果たして、意味論のいう「指示物」（"referent"）をよく表現しえていると言えるだろうか。キャロライン・ブラウンなら、「トール・テイル・コンシート」(18) と言うであろう諧謔精神の横溢したこのレトリカルな言辞は、表現内容の虚偽性を示唆する、「嘘シグナル」(19) として機能しているのではないのか。語句の反復という

修辞法は、「人」は全て「孤独」なる「異邦人」、と喝破したテキスト巻頭に掲げられた「散文詩」をはじめとして、ウルフがしばしば使用した筆法だが、ここでの反復は「決戦」の深刻度を強調しているのではなく、むしろ逆に、深刻度を軽減する用をなしているのではないのか。同種の表現を一、二挙げてみよう。体力がめっきり衰えたガントと世話をするヘレンは、「生を超え、死を超え、記憶を超えて（“beyond life, beyond death, beyond memory”）」（XIII）その絆を強固にしていた。「留置場」住まいを一度ならず経験している「不出来」な長男・スティーヴではあったが、エライザは、いついつまでも「希望」を捨てていなかった。「自然にそむき、理性にそむき、この世の仕組みにそむく（“against nature, against reason, against the structure of life”）」（XVIII）ことではあったのだが。ここに見られる殆ど言語遊戯とも言いたい過大にして滑稽な表現と、ガント夫婦の確執を記したその表現との間に、一体どれだけの径庭があるであろうか。つまり、ガントに対する救済措置が、コミカルな反復という表現操作を介しても施されていると言いたいのである。「二ヶ月」に及ぶカリフォルニアへの大旅行から、ある日の早朝突然帰ってきた時、それに気づかず忙しげに朝食の用意をしていたエライザに、「帰ってきたぞ」と声をかけ、「不器用な手つき」でエライザの「肩」（VII）に手をのせている、そんなガントをどうして悪人呼ばわりできようか。ベンが亡くなったとき、「お前の人生は辛い人生だった。わしがこんな人間でなかったら、楽しくやってこれたのになあ。残された時間をせいぜい大事にして生きていこう」（XXXVI）などと、殊勝な心優しい言葉をかけているのも、他ならぬガントであった。後年、『大地の蜘蛛の巣』において、エライザが「あの人（ガント）を恨もうとも思ったわ。でも今では悪く言う気はないわ」と語るに至り、「あの人」は「不思議な人」で、「悪い時代」にあっても「あの人がいれば凍える人間は一人も出なかった。ひもじい思いをした人間もいなかった。誰もが腹いっぱい食べれたわ」[20] と言って、これ賛嘆していることも知っておいていいことだろう。ガントは悪罵を浴びせていただけの平板至極な人物なのではない。

さて、いつも豊かな食べ物を備えたガント家であったが、笑いに関しても、すこぶる豊かなものがあった。「限りないエネルギー」で、「家族の誰よりもラブレー風の俗臭」（X）を振りまく「どもり」のルーク、ガントをして「やつは呪いじゃ、たたりじゃ、下等のなかの下等、最下等の人間」と言わしめている「できの悪い」（XVIII）スティーヴの笑い、そして「大いなる野卑なバーレスク精神」を持ち合わせ、時にはユージーンに「笑いの卒中」（XI）を惹き起こさせている姉のヘレン。いや、エライザですらその資質においては不足がなかった。妻・エライザの頑健な身体を羨み、「憎悪」さえしていた夫・ガントは（その頃のガントは「前立腺肥大」の病を患っていた）、ある日、エライザの「同情の涙」を求めて、廊下に伏して死んだふりをしてみせたのだが、顔を蒼

白にしているベンをしりめにエライザは、「お調子者に天罰が下ったのよ。遅かれ早かれこうなることはわかってたわ」とすげなく言い放ち、更に付け加えてこう言ったのである―「お前、財布を取り出しな…わたしは葬儀屋を呼んでくるから」と。ガントが激怒し、いつもの罵声を浴びせたことは言うまでもない。

地獄の犬め。お前はわしの心の臓の血を飲もうというのか…貴様は人間じゃない。血に飢えた化け物じゃわい。（XX）

だがエライザは、「地獄の犬」でも「化け物」でも、はたまた「慈悲」を知らない人間でもなかった。ガントの茶番にすぐさま気づいたため、自分も負けじと「芝居」をしてあげたまでだ。エライザにも遊び心が欠落していなかったということだ。そのエライザを実質上の語り手とした『大地の蜘蛛の巣』が、一編の笑いの文学ともなりえているのは、エライザの本体の一角にそのような資質が付与されていればこそだ。(21)

『天使』の笑いと言えば、「気絶」する者さえ出てくる、いや、人間ならぬ「犬」や「馬」をも立ち止まらせる、驚きの「黄金の美声」（XIV）の持ち主「肉屋」のジェイが惹き起こすドタバタ喜劇の笑い、「シェイクスピア没後300年」を記念した「ページェント」での、「大地」（XXVII）を揺るがさんばかりの笑い、「細心」の注意をもって「入念」に「鉛筆」を削り、「ストーブ」に燃料を補給し、「椅子」の位置を直す等、勉強の「準備」こそ怠りないが、「勉強はとんとしない」（XXIX）プルピット・ヒルの学生達の日常を面白おかしく描いたひとコマ等々、例証するにはおよそ事欠かないのだが、今は先に進もう。

Ⅳ

兄ベンの死は、ユージーンにとり悲しい大きな出来事であった。家族の中で最も敬愛していたそのベンが、「26歳」と言う若さで、「黄泉の国（“the shade of death”）」（XXXV）へと突如旅立ってしまったのだから。姉のメイベルに宛てられた書簡の中でウルフは、「僕の知っているアッシュヴィルは、ベンの死と共に消えてしまった」(22) と記し、ベンの死がもたらした衝撃の深さを語っているが、ベンの死を軸として展開される物語が全三章に亘っていることも、ユージーン（＝ウルフ）にとりベンの存在がいかに大きなものとしてあったかを示している。短編集『死より朝へ』がベンに捧げられているのも故無しとはしない。しかし、ベンの死が有した意義はそれにとどまるものではない。

周知のようにこの小説は、「死の小説家」(23) によって書かれた死をめぐっての物語

でもある。「卒中」で亡くなるガントの父親・ギルバートの死が告げられる第一章から、「亡霊」ベンが登場する最終章（XL）に至るまで、作中にはいわば死臭が、それも実に濃厚に立ち込めている。しかし他方、その臭気を霧散、消去するに足るだけの、生の強力なエネルギーにも満ちているのがこのテキストである。例えば、ベンの死とその直後のガント一家を描いた一幕。一家は深い悲しみに沈み込む。悪態をついていたガントでさえ、やがて口をつぐみ「杖」にもたれて座り込む。エライザは、「自分の血の一部、自分の身体の一部」であった息子ベンの「冷たくなった手」を、「ざらざらした手の平」（XXXV）に包み込む。しかし、ベンの物語はかく悲しみにくれる一家の前景化で結ばれているのではない。

エライザが、形見にとベンの髪の毛を一房切り取ると一家は階下の「散らかった台所」へと降りてゆく。ヘレンがユージーンに、少し休んで疲れをとるようにと言葉をかける。しかし、「電報」を受け取るとすぐさま大学町のプルピット・ヒルから駆けつけて来たユージーンは、空腹が過ぎて眠れやしないと言ってこぼす。するとルークが言う、いつものどもり口調で―「な、な、な、なんだって。どうして言わなかったんだ。何か食わせてやるから町に行こう」と。二人はまだ明けやらぬ薄明の中、町へと向かうことになるのだが、出かける前ユージーンは「オーブン」の中を覗き込む。次の一節は、そんな文脈に置かれた一節である。

「お前、何を探しているんだい」うさんくさげにエライザが聞いた。
「何かうまいものでもないかと思ってね、エライザ嬢」ユージーンはほうけたみたいな顔をし、意地悪げにエライザを眺め、次に水兵のルークに目をやった。二人は互いにわき腹をつつき合いながら、突然大きな声で笑い出した。ユージーンは、冷たくなった水っぽいコーヒーが半分ほど残っているポットを持ち上げ、くんくんと嗅ぎ始めた。
「ああ、これでやっとベンはこのコーヒーとも縁が切れたんだ。これからは母さんのコーヒーを飲まなくてすむんだ」
「ウハッハッハ」と水兵・ルーク。
ガントも親指をなめながら、にたにた笑っていた。
「なんてこと言うの、恥を知りなさい。それにしても、かわいそうなベン」そう言いながら、ヘレンも馬がいななくように、これまたくすくす笑い出した。
「コーヒーがどうかしたのかい。おいしいコーヒーじゃないか」腹だちげにエライザが言う。げらげらとみんなが笑った。エライザは一瞬口をすぼめた。（XXXVI）

突然、大きな声で笑い出すユージーンとルーク。にたにた笑っているガント。そのガントの「フルタイムの看護人」[24] へレンも、同じくくすくす笑い出す。笑い方の違いこそあれども、何れもが他愛ない笑いにすぎない。詰まるところ、「水っぽいコーヒー」しか入れない吝嗇家・エライザへの揶揄以上のものではないのだから（エライザのけちさかげんは、「困窮」を極めた南北戦争後の時代に幼少期を過ごし、その窮乏生活が「癒えることのない傷跡」（Ⅰ）を胸中深くに残してしまったがためであった、と作中では説かれている）。しかし、この場面を引いたのは、エライザが揶揄されていることを知るためではない。エライザを笑っている家族のその笑いが「状況」との間に作り上げている緊張関係が、特筆に価しよう一つの意味を生み出しているように思えるからだ。この時二階では、ベンの死体が横たわっていたのではないのか。ガント一家の気丈さは、『時と河』（XXXⅢ）において改めて再現されることになるのだが（エライザに看取られ、痛ましくも壮絶なる最期を遂げる巨人・ガントの「亡き骸」が、「コーン・ウイスキー」の酔いのうちに「忘れ去られる」）、ともあれ、一家が笑いをもってここで顕現させているものは、圧倒せんばかりのその強靭な精神だ。悲しみの何たるかは知っていながらも（彼らは目を涙で曇らせてもいた）、いたずらな感傷に耽ることはなかったということだ（因みにユージーンは、「死」をベンを「解放」するためにやってきたベンの「友人、恋人」と観じている）。しかし、この一件は、更なる展開に至るその序章にしかすぎない。

「四時」を少しばかりまわった早朝「大いなるしじま（“enormous silence”）」の中、家を後にしたユージーンとルークは、「雄鶏のたてる甲高い鳴き声」を耳にしながら、終夜営業の「小さな安食堂」・「ユーニーダ食堂（“Uneeda Lunch”）」へと出かけて行く。その道すがらのやりとりの一節。

「憶えてるかい、ベンのやつがペットおばさんとこのみなしご・マーカスの髪の毛を刈った、と、と、と、ときのこと」ルークが言った。
「ああ、お・ま・るをかぶせて、生え際をきれいに刈り込んだっけ」そう言ってユージーンはきゃつきゃっと笑い出した。大きなその馬鹿笑いで（“wild laughter”），町の人達が目を覚ました。（XXXⅥ）

やがて二人が辿り着いた食堂には、いつものように、いつもの面々がたむろしている。その昔、ユージーンの誕生に関わった医師・カーデイアック、酔いつぶれたガントを「保護」すること「七百回以上」（XⅣ）と大言する、同じく医師のマックグワイア，ベンの同僚であった印刷工のタグマン。程なくして、「骸骨」に「黒いフロックコート」を着せたようないでたちをし、顔はと言えば「馬づら」の葬儀屋・ハインズがやってく

る。嘗て、夜明け時、ベンもいりびたっていたこの食堂では、「牡牛が鳴くような大きな笑い声」（XXXVI）が響き渡ることになるのだが、祝祭然としたこの賑やかな一場については「別稿」[25] で既に触れているのでこの位にとどめ、その日の昼過ぎ、ハインズの葬儀店で展開されるファルス・笑劇に目を転じよう。

入念に施されたベンの「化粧」を見てルークが言う―「す、す、すこし、し、し、し、しろっぽく見えないかね」と。するとハインズは、「ちょっとお待ちを」と言ってポケットから「口紅」を取り出し、すばやくそれを塗り付ける。そして「ぞっとするようなバラ色」の頬を見ながら、得意になって喋りだす―「最高のできばえです。百万年生きてもこれ以上のものはできません。これはもう芸術ですよ」と。一介の葬儀屋・ハインズが、「キャンバスを前にした芸術家」に変じたことに驚きあきれたユージーンは、「うめくような笑い声」をたてる。それも「椅子」から滑り落ち、「脇腹」を両手でたたき、「チョッキ」の「ボタン」をはずし、「ネクタイ」を緩め、更には「涙」を流すに至るほどの、なんとも凄まじい笑い。ルークが、「き、き、き、きでも狂ったのか」と思わず声をかけるほどの。ユージーンの笑いが思い上がった「芸術家」・ハインズへの嘲りであることは明らかだろう。しかしその笑いが、「胸」の上で「冷たい青白い手」を組んだ、ベンの亡き骸が載せられたその「台」（XXXVI）を前にした笑いであることに思いをいたせば、そこには別様の意味をも読み取れるはずだ。端的に言おう、その凄まじい笑いは、ユージーンの意図とは無関係に、そこに漂う死という虚無を、いわば吹き飛ばしてでもいるかのようだということである。遺体の「安置所」たる葬儀店で、「階下」の「散らかった台所」で演じられたあの一幕が、改めて再演されていると言ってもかまわないだろう。

「気遣い」はもとより、「時間」も「金銭」も「生前以上」にはらわれ使われた「りっぱな葬儀」も終わり、ベンはアルタモントの町を見下ろす見晴らしのよい「丘」の墓地に埋葬される。その日の夕暮れ時、町を去る前もう一度墓を訪れようと、ユージーンは一人丘へと向う。「曲がりくねったラットレッジ通り」を離れ、「舗装されてない一本の通り」に入って行くと、道沿いに建っている「大きな木造の療養所」から「揚げ物をしているジュージューという音」が、そして「結核患者」の「空咳」や、厨房で働く「黒人達」のたてる「豊かな笑い声」が聞こえてくる。やがて「大きな星々」が「誇らしげ」に「天空」に昇り、町の明りが「楽しげに」またたき始める。ベンの墓の「つんとしたかすかな土の臭い」を覚えながら、丘の頂に立ったユージーンに、「遠く」の方から「汽笛」の音が、人々の「話し声」が、そして「笑い声」（XXXVIII）が聞こえてくる。殆ど見落としかねないような文字通りのディテイルだが、このように点綴された笑いの効験の程は、決して小さくない。テキストが執拗に奏している、死というこの世の悲しみ

に抗する、もう一つの基音、生を言祝ぐ格別の笑いとしてそれは現出しているのであるから。それは『天使』一作に限らない、ウルフ文学がその基底に据えた大事な一項、苦難の向こうにしかと措定された、生の賛歌のもう一つの「表象」(26) でもあるのだから。

これをもって『天使』の笑い及びその機能を遺漏なく論じつくした、などと言うつもりは無論ない。しかし、少なくともその豊かなありようのいくばくかは説きえたと思いたい。

(註)

(1) Cf. Jack D. Wages, "Names in *Look Homeward, Angel* ," in *Critical Essays on Thomas Wolfe,*(ed.) John S. Phillipson (G.K.Hall & Co., 1985), pp.26 - 36.
(2) B. R. McElderry, "The Durable Humor of *Look Homeward , Angel* , " in *Arizona Quarterly*, XI (Summer, 1955) , p. 123.
(3) Pascal Reeves, "The Humor of Thomas Wolfe ," in *Southern Folklore Quarterly*, XXIV (Dec. , 1960) ,pp.109-120.
(4) Floyd C. Watkins, "Wolfe," in *The Georgia Review* , XII (Spring, 1958) pp.79-82.
(5) Elizabeth Evans, "Thomas Wolfe: Some Echoes from Mark Twain," in *Mark Twain Journal*, 18, No. 2.(1976), pp.5-6.
(6) T. C. Moser, "Thomas Wolfe: *Look Homeward, Angel,* " in *Thomas Wolfe: A Collection of Critical Essays* , (Prentice-Hall, 1973), p. 122.
(7) John Hagan, "Structure, Theme, and Metaphor in Thomas Wolfe's *Look Homeward, Angel* ," in *Critical Essays on Thomas Wolfe*, op. cit., p. 36.
(8) Louis D. Rubin Jr., "Thomas Wolfe: Time and the South, " in *Thomas Wolfe: Three Decades of Criticism* , (ed.)Leslie A. Field (New York Univ. Press, 1968) p. 79.
(9) Aldous Huxley, *Music at Night and Other Essays,* (Chatto & Windus , 1970) , pp.6-14.
(10) Terry Roberts, *Literary Masterpieces* : *Look Homeward, Angel*, (A Manley, Inc. Book, 2001), p. 82.
(11) Richard S. Kennedy, "Thomas Wolfe's Fiction: The Question of Genre ," in *Thomas Wolfe and The Glass of Time*, (ed.) Pascal Reeves (Univ. of Georgia, 1971) , p. 1.
(12) Bernard DeVote, "Genius is Not Enough ," in *Thomas Wolfe* : *A Collection of Critical Essays*, op. cit., p. 73.
(13) Cf. Floyd C. Watkins, "Rhetoric in Southern Writing, " in *The Georgia Review*, XII (Spring, 1958) , p. 81.
(14) ガントを評してワトキンズは、「あらゆる小説」の中にあって「最も愛すべき人物の一人」だと言った。Floyd C. Watkins, *Thomas Wolfe's Characters* , (Univ. of Oklahoma Press, 1957) p. 15..
(15) 木村洋二『笑いの社会学』(世界思想社, 1983) , 64頁。
(16) C. Hugh Holman, *The Loneliness at the Core*, (Louisiana State Univ., 1975), p.115.
(17) Terry Roberts, op. cit., p.60.
(18) Carolyn S. Brown, *The Tall Tale in American Folklore and Literature*, (Univ. of Tennessee Press, 1987) , p.55. この件については次にも言及あり。岡本正明「トマス・ウルフの作品と民衆形式」『アメリカ文学』第52号 (冨山房、平成3年) , 38頁。
(19) ハラルト・ヴァインリヒ著、井口省吾訳『うその言語学』(大修館書店、1973) ,120頁。

(20) Thomas Wolfe, "The Web of Earth" in *From Death to Morning*, (Charles Scribner's Sons, 1935), p.298.
(21) 拙稿「『大地の蜘蛛の巣』考―その位置づけをめぐって」古平・常本編著『人間と世界―トマス・ウルフ論集2000』(金星堂、2000) , 243頁―246頁を参照願いたい。
(22) *The Letters of Thomas Wolfe*, (ed.) Elizabeth Nowell (Charles Scribner's Sons, 1956), p.178.
(23) J. Russell Reaver and Robert I. Strozier, "Thomas Wolfe and Death ," in *Thomas Wolfe: Three Decades of Criticism* , op.cit.,p.41.
(24) Joseph Scotchie, *Thomas Wolfe Revisited* , (Land of the Sky Books, 2001), p.48.
(25) 拙稿「トマス・ウルフと〈食べ物〉と－『天使よ故郷を見よ』をめぐって」『オベロン』第24巻第1号 (南雲堂、1991)、29頁―31頁。
(26) 「表象」に関しては、上記の (25) 及び次の拙稿を参照されたし。「トマス・ウルフ覚書―ウルフと〈真新しい真珠色の朝の光〉」『学習院女子大学紀要』第12号 (2010)、147頁―158頁。

(本学教授)